〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(43)〉

日常性から保育カリキュラムを考える(1)
附属幼稚園『しいのみパーティー』の姿から

宮里暁美

お茶の水女子大学「幼保プロジェクト」の「幼保」にはそもそも、大学と二つの附属園（幼稚園とナーサリー＝幼・保）の共同性を学部学生の教育において育てようという目的と、そこからひいては各園の日常的な保育カリキュラムをよりよいものにしていく関係性が育まれるようにという願いとが二重に込められていた。しかし、このプロジェクトが始まった三年半ほど前にはまだ、この「幼保」は構想であり仮説に過ぎなかった。

しかし、「共同」が「協働」になるというプロセスとはこのようなものなのか、といまになって認識する。附属幼稚園といずみナーサリーは、子どもの生活の日常性を守るという基軸がぶれない。それは随時状況に即応して、考えられる最良の環境をつくり続ける運動態であるということだ。大学（外部）に在る者には計り知れない計画性と柔軟性をもっていた。園庭をはさんで隣り合う幼稚園とナーサリーの子どもたちの出会いも、その中で自然に（と見える仕方で）起こった。「幼」と「保」が深い体験として出会う協働の姿が、それぞれのカリキュラムの中に無理なく位置づいてきた。今回は幼稚園、来月はナーサリーからの報告である。

（プロジェクトリーダー　浜口順子）

子どもたちの声から始まるかかわり

十月末、園庭にたくさんのシイの実が落ちた。シイの実は煎って食べることができる。子どもたちは拾ったシイの実を洗い、教師が鍋で煎るのを楽しみに待ち、こんがりと焼けたシイの実の皮をむいて食べた。その味は、子どもたちにはなじみの薄い味だったかもしれない。香ばしさの中に柔らかな秋の味わいが広がる。何より、自分たちが拾った実が食べられる、ということが、子どもたちの心を弾ませ、幼稚園には連日シイの実を煎る香ばしい香りが流れていた。

そのようなころに、子どもたちの中から「ナーサリーの子たちにも食べさせてあげたいな」という声が出てきた。集めたシイの実がたくさんになったので、『しいのみパーティー』をしようか、ということになり、「明日来てくださいって誘いに行こう」ということになった。

担任から頼まれた私は、数人の子どもたちと一緒にいずみナーサリーへと向かった。ナーサリーのドアをたたくと、K保育士が戸口に出てきてくれた。子どもたちの話をゆっくりと聞き「いいわね。明日行くね」と答えてくれた。それだけでなく「いま、お昼寝でみんな寝ているのよ。ちょっと見ていく?」と言って、中の扉を開けてくれた。お昼寝中のナーサリーは、特別の雰囲気で、子どもたちは抜き足差し足で歩きながら、小さい子どもたちの寝顔を見つめていた。

翌日、ナーサリーの子どもたちがお山の上から下りてくると、年長組の子どもたちは煎ったばかりのシイの実をごちそうした。堅い皮をむいてあげたり、ナーサリーの子どもたちがシイの実を小さな口に入れるのをじっと見たり、運動会で踊った「よさこいソーラン」を張り切って踊ったりする姿もあった。

▲勇ましい踊りを披露「見て！　かっこいいでしょ」

ナーサリーと幼稚園のかかわりが、子どもたちの声から始まるということを、私たちはとても大切にしている。それは、時を積み重ねる中で子どもたちの中から自然に出てくる姿である。「誘いに行こう！」「知らせに行こう！」という声が子どもたちの中から自然に出てくるようになるためには、時を積み重ねていくことが何より大切である。

春、新しく入園した子どもたちも幼稚園に慣れ始め、園全体に少しずつ落ち着きが見られるようになったころ、お山の上で遊んでいるとナーサリーの建物を見つけて、「あそこは誰のおうち?」と聞かれることがある。「あそこには小さいお友達がいるのよ。いま何しているのかな?」と答えると、子どもたちは「ふーん」とうなずいたり、ナーサリーのドアをそっとのぞき込んだりしていた。春は、ナーサリーも新しいメンバーが加わる時期であり、ドアは閉じたままのことが多かった。

六月、幼稚園のじゃがいもパーティーにナーサリーの子どもたちを招待し、同じ時を過ごしたころから、ナーサリーのドアは、ノックできるドアに変わっていった。いろいろな時に、ナーサリーの子どもたちのことを思って行動する姿が出てくるようになり、「遊びに来て！」と誘うだけでなく「遊びに行きたい」という声も出てくるようになった。「黙って来てしまったようだから、一度先生に聞いてきなさいねと帰しました」という電話がかかってくることもあった。「おじゃまします」とあいさつし、ナーサリーの中に入り、しばらくそこで過ごしてきた子どもたちは、とても満足げな顔で帰ってきた。片づけを手伝ってとても感謝されたことがうれしい様子も見られた。このようなかかわりを重ねる中で、楽しいことがあると「ナーサリーにもお知らせしよう！」という声が子どもたちの中から出てくるようになったのだと考える。

▲「皮をむいてあげるね！　おいしいよ」

さまざまなやりとりの積み重ねが豊かなものになった背景には、ナーサリーと幼稚園の保育者が共通の思いをもっていたことがある。ナーサリーと幼稚園の保育者が共通にもっている思い、それは、子ども同士の自然なかかわりを大切にしよう、子どもの意欲を大切に受け止めていこうという思いである。『しいのみパーティー』のお知らせをナーサリーに届けた子どもたちに「いま、みんな寝ているのよ。ちょっと見ていく?」と呼びかけてくれたK保育士の言葉からもそのことがよくわかる。後で、お昼寝中のナーサリーに入れてもらったことのお礼を伝えると、K保育士から「子どもたちが中に入りたそうな顔をしていたし、きっと顔を見て誘いたかったと思ったのよね。お昼寝中だから声はかけられないけれど、顔は見たいかなって思って。少し変かな、とは思ったけれど」という答えが返ってきた。子どもたちの思いを大切にしようという姿勢が共通にあることを実感した答えだった。

幼稚園教育要領の中に、いろいろな人とのふれあいを経験させていく際の留意点として「自分の生活に関係の深いいろいろな人と触れ合い、自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験を通して、これらの人々などに親しみをもち、人とかかわることの楽しさや人の役に立つ喜びを味わうことができるようにすること。[注]」という一文がある。いずみナーサリーと附属幼稚園の間で体験されていることは、まさに『自分の感情や意志を表現しながら共に楽しみ、共感し合う体験』ではないだろうか。そして、そのような体験は、双方の保育者が、子どもたちが自分の感情を素直に表現すること、自分の意志をもって行動することを大切に支えていること、そして何より自然なかかわりの中で共感し合う体験を大切にしていることによって生み出されているのである。

▲赤ちゃんに会えてうれしい子どもたち！

お昼寝中のナーサリーは、静かな寝息に包まれ特別の雰囲気があった。赤ちゃんの寝息を聞きながら、そーっと、お昼寝中の子どもたちの顔をのぞいた印象は、子どもたちの中に温かさと共に深く残っていくのではないだろうか。温かさの印象、いとおしいと思う気持ち、それがナーサリーの子どもたちとのさまざまなかかわりを通して子どもたちの中に残っていくものなのだと考える。

「大学の中心で赤ちゃんが笑う」という願いのもとで誕生したいずみナーサリーは、いま確かな寝息を立てて大学の中心にある。幼稚園の子どもたちは、その寝息をいとしく感じ取れる近さの中で生活している。「大学の中心で赤ちゃんと子どもたちが共に笑う」という生活は、このようにしてゆっくり確かに積み重ねられている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園副園長）

注 『幼稚園教育要領』領域「人間関係」内容の取扱い（6）